

【大社更生保護女性会講演】

いのちへのまなざし

島根県立大学短期大学部名誉教授 江角弘道

私達は、いのちを見る視点（まなざし）として、「役に立つかどうか」ということで見ていることがほとんどではないかとおもいます。昔は、「姥捨山」というものがあつたと聞いています。

昔むかし、姥捨山という山がありました。60才になったおばあちゃんは、皆、その山に捨てられてしまいました。

太郎のうちのおっかあも、とうとう60才になり、姥捨山へ連れていく日がきました。太郎は、おっかあを背負って山を登りはじめました。とぼとぼ、歩いているうちに、とうとう山頂まで着いてしまいました。背中からおろすと、おっかあは言いました。「おい、太郎や。木の枝をぼつん、ぼつんとくじいて登ってきたから、暗くなったらそれをたどって、迷わず帰れよ。」と、その言葉を聞いた太郎は、とてもさみしくなり、こんな知恵があり、やさしいおっかあを捨てていったら、とてもさみしくて、生きていかれない。と思い、また背負って一緒に山を下りることにしました。そして、家に帰った太郎は、おっかあを縁の下にかくして、こっそり住むことにしました。

そんなある日、たいそうえらい殿様が村をおとずれ、村人に言いました。「わらのなわをつくれ。灰のなわだ。」

難しい命令に村人たちは、皆こまりはてました。太郎もずいぶんなやみましたが、しかし、よい考えはいっこうにうかびません。困りはてた太郎は、家にもどりおっかあに相談しました。「殿様が、灰のなわをつくれと言うんだが、どうしたらできるのか、わかったら教えてくれ。」すると、おっかあは、わらを燃やしてみる。そっくり燃やしたものをこれが灰のなわですと届けてみる。」と言いました。太郎は、おっかあが言ったとおりにしました。すると、殿様もたいそうかんしんして、どのように作ったのかたずねました。太郎はありのままに答え、殿様はその話しを聞き、考えました。そして、今までしていた姥山のならわしをやめるよう村人に言いました。そのことを聞き、太郎はとても喜び、おっかあも喜びました。そして、その日以来、姥捨山はなくなり、みんな、年寄りを大切にするようになりました。

あるおばあちゃんが「早く死にたい、早く死にたい」といっていました。そのわけを聞いてみると、自分は介護が必要となつてきて、「私はこんな体になつてちつとも役立たない、生きている意味がない。息子からは、邪魔者扱い、嫁

からは鬱陶しい目でみられる。おまけに孫にまでバカにされる。」ということですから。このおばちゃんの生きる上での視点は、「役に立つかどうか」です。また、息子や嫁や孫たちもこの視点で、いのちを見えています。現代社会の多くの人々の基本的な視点は、役に立つかどうかで、人を受け入れたり、人を捨てたりしています。

次の詩の作者（山田康文くん）は、1960年に奈良県桜井市に生まれました。難産で生まれたためか、康文くんは脳性マヒ（言葉も十分に話せず手足も不自由になる病気）で、お母さんは万一を願って数々の病院を回られ、あらゆる治療を受けたそうですが、康文くんの症状は良くならなかったそうです。お母さんは、康文くんを産んだことに、悩みぬいて一緒に死ぬことを考えました。この子は、役に立つか立たないかという視点から見ると、全く役に立たないし、大変なお荷物になってくるのです。しかし、死を押しとどめたものは家族ぐるみの愛と康文くんの強い生きる意欲でした。そして、康文くんは8歳の時、奈良の明日香養護学校に母子入学しました。その養護学校の向野幾代先生が、康文君の気持ちを表現しようと試みます。しかし言葉も満足に話せない康文くんから言葉を引き出すには、大変な苦労がありました。向野先生が「投げかける言葉」が、康文くんの「言いたい言葉」の場合は、康文くんがウインクでイエス、ノーの時は康文くんが舌を出すという取り決めをして、次の詩を完成させました。この詩の出だしの「ごめんなさいね おかあさん」だけで1ヶ月かかったといいます。気の遠くなるような作業を経て、この詩は生まれました。

「おかあさん ぼくが生まれて ごめんなさい」（山田康文作詞）

ごめんなさいね おかあさん  
ごめんなさいね おかあさん  
ぼくが生まれて ごめんなさい  
ぼくを背負う かあさんの  
細いうなじに ぼくはいう  
ぼくさえ 生まれてなかったら  
かあさんの しらがもなかったろうね  
大きくなった このぼくを  
背負って歩く 悲しさも  
「かたわな子だね」とふりかえる  
つめたい視線に 泣くことも  
ぼくさえ 生まれなかったら  
ありがとう おかあさん  
ありがとう おかあさん  
おかあさんが いるかぎり

ぼくは生きていくのです  
脳性マヒを 生きてゆく  
やさしさこそが 大切に  
悲しさこそが 美しい  
そんな 人の生き方を  
教えてくれた おかあさん  
おかあさん  
あなたがそこに いるかぎり

【参考：向野幾代著、『お母さん、ぼくが生まれてごめんなさい』、産経新聞社】

この詩の作者の康文くんは、この詩ができた2か月後の昭和50年6月11日の風邪をこじらせて休んでいるうち、何かのはずみで枕で鼻と口をふさぎ、亡くなりました。15年の短い一生でした。普通に考えられることは、「なぜこんな体に産んでくれたか」と親に文句を言うことが考えられますが、康文くんは、「お母さん、ぼくが生れてごめんなさい」とわびている。この言葉は、役に立つとか立たない、損か得かなどを超えた言葉ではないでしょうか。この詩は、まさしく康文くんの中にまします如来様が作られたものと考えられます。この詩の中で、「やさしさこそが大切に 悲しさこそが美しい」とは、如来様の言葉そのもののようです。この詩は、如来様の存在を確信させる詩ではないでしょうか。

この詩を引き出してきた養護教諭の向野幾代先生の指導が実にすばらしい。今から5年前の私が島根県立看護短期大学在職中にこの詩のことを知り、向野先生に客員教授になっていただき、看護学生に講演をしていただきました。その講演の中で向野先生は、「子どもの心の声を聞くことが教育の原点です。康文くんと過ごした8年間、口の利けない康文くんと、どれだけたくさんのお話を話し合ってきたことでしょうか。康文くんの言いたいまじめな話も冗談も、私にはなんでもわかりました。出会った最初の頃から、私にはわかっていたのです。人は言葉にならない言葉を持っている。声にならない願いを持っている。その言葉や願いを聞くには、耳で聞いてはいけない、心で、体ごとで聞くんだ、と。なぜなら、私の父も重度脳性マヒの障害を持っていましたから、ずっと父の姿を通して、言葉にならない言葉を聞いて育ったからです。」と述べられていました。つまり「心耳」をもって聞くということが大切であるとお話くださいました。

皆様がたは、更生保護という尊い仕事をなさっていますが、青少年を健全に育成するためには、その子たちの心の声を聞くことが大切なように思えます。

この康文くんの詩はすぐにお母さんに見せられました。お母さんは、この詩を読んですぐに、次の詩を作られました。

私の息子よ ゆるしてね (山田康文くんのお母さん作詞)

わたしのむすこよ ゆるしてね  
このかあさんを ゆるしておくれ お前が 脳性マヒと知ったとき  
ああごめんなさいと 泣きました いっぱい いっぱい 泣きました  
いつまでたっても 歩けない お前を背負って歩くとき  
肩にくいこむ重さより 「歩きたかろうね」と 母心  
”重くはない”と聞いている あなたの心が せつなくて  
わたしの息子よ ありがとう ありがとう 息子よ  
あなたのすがたを見守って お母さんは 生きていく  
悲しいまでの がんばりと 人をいたわるほほえみの  
その笑顔で 生きている 脳性マヒの わが息子  
そこに あなたがいるかぎり

障害を持った康文くんの生きる価値はどこにあるのでしょうか。「役に立つ、立たない」がすべてではなく、人は存在そのものに意味があります。このことを深く考えて指導をなされた向野先生はすばらしいですが、さらに、同じく障害者である向野先生のお父さんも素晴らしい人であると考えられます。向野先生は、お父さんから「大きな財産」をいただいたと次のように述べておられます（現代人の伝記（1）、致知出版社、2003）。

「本音を言えば、私は父のことをずっと恨んでいました。大学も、貧しいが故に学費もなく、アルバイトに継ぐアルバイトで、ろくに勉強もできませんでした。父さんが障害者だからこんなことになるんだと、父を恨んでいたのです。ただ、「障害者の父」と思ったことはありません。体の醜さとは全然別個に、父さんは父さん、一人の人間として見えていました。

私が、初めて体の不自由な子と取り組んだ日、外見の不自由さに目を奪われることなく、まっすぐにその子の心に飛び込んでいくことができたのは、父の存在から教わったものだと、いま思います。働きに出ることができない父は、いつも家で留守番をしていました。人が来ると、歩けない父は大急ぎで這って玄関に行きます。襖を開けると、ちょうどイノシシが竹藪から出たかのように「ハア、ハア、ハア」とものすごい形相です。お客さんはびつくりして、「しっしっ、そばに寄るな、あっちへ行け」と、えらい勢いで追い払いました。何度もそんな情景を見た私は、一度父に言ったことがあるのです。「父さん、悔しくないの？ あんなこと言われて」と。「ちっとも悔しくない。誰だって私を見たら『しっしっ、あっちへ行け』って言うやろ。私ももし逆の立場なら言うかもしれない。でも父さんはこの体を生きるおかげで、わかることがある。玄関に訪ねてきた人は、どんな立派な服を着ていようと、名刺を出そうと、心の値打ちの低い人があるし、名刺も何もなくても、洋服がどう

であれ、心の値打ちの高い人がある。そういう人に、父さん生きている間中、出合って死んでいけるから、ちっとも悔しくない。幾世も大きくなったら、心の値打ちの高い人に出会っていきなさい」そう言われました。その時は、何を言っているんだと思いました。貧しさにばかり心を奪われて、父の言うことがわからなかったのです。でも、心には留めていました。いま思えば、ああ、あれが、父がくれた財産だと思います。何もしてもらえなかったと父を恨んでいましたが、そうではなかった。大きな大きな財産を、私は父からもらっていたのです。

父は76歳で亡くなりました。ただただ合掌し続けて生きてきた父の手は、人は生かされて生きているのだという人間観を、私に教えてくれていたのです。身近な人に、遠くの人に、自然に、物に、「ありがとう」と合掌する心を父は教えてくれました。どんな時にも、だだ黙々と合掌するしか許されない父でした。障害のある康文くんの中に、幼い父の姿を見、また父の中に康文くんの成人した姿を見つめていたのです。」

現代人は、頭でっかちになって、いのちを役立つか役に立たないかという視点でモノ化し、合理主義で判断しようとしています。例えば、臓器を部品と見て、役に立たないいのちを犠牲にして、役立ついのちを救おうとしています。出生前診断で選別し、役に立たないいのちは生まれてくるなといます。向野先生は、お父さんから、「人は生かされて生きているのだという人間観」を、学んでいらっしやいます。だから、よくよく考えてみるに、人は「自分で生きている」のではなくて、人々やさまざまなもの、例えば空気や水、太陽などの自然のおかげで生きています。それを「大自然に生かされている」「おおいなるものに生かされている」「如来様に生かされている」のです。いのちの視点とは「生かされている存在である」ことを深く思うことです。私たちは、私たちを取り巻く全てのもの（見えるものと見えないもの）に生かされています。だから生きてゆくことは「おかげさま」なのです。この如来様は、神様、大いなるもの、「いのちの根源」、「大いなるいのち」、「見えないいのち」、「サムシング・グレート」などと呼ばれているものです。

いま、康文くんのような障害者の問題は、実は高齢者たちの問題でもあります。高齢になるとほとんどの人がなんらかの障害を持ってきます。今健康な人は、障害が先送りされているということです。歳をとると、足腰が不自由になって車椅子が必要になったり、認知症になったりと障害者になってきます。だから康文くんみたいな障害者は、今健康な人たちの先輩であるといえます。その障害者になったときに、持つべき「いのちの視点」とは、「如来様に生かされている存在」であることを悟り、感謝の生活をしてゆくことではないのでし

ようか。「生かされて生きるや今日のこのいのち、<sup>あめつち</sup>天地の恩、父母の恩」という歌があります。

さらに、もうひとつ「いのちのまなざし(視点)」を考えてみたいと思います。それは、「今日、ただ今の命」についての視点です。「**私たちが生きている今日という日は、昨日死んだ人が切に生きたいと思った日である。**」という「いのちの今」についての視点が大切で、「だから、今日という日を無駄に過ごさず、生かされていることを考えて行こう」と思います。ここからいのちの尊さがでてきます。なぜ、このような視点を述べるかということ、平成 11 年 12 月 26 日に、20 歳だった娘真理子が、無謀な飲酒運転の車に衝突され命を奪われました。もっと生きて活躍をしたかったろうに。結婚もし、子供も育てたかったろうに、二十歳という年齢ならば、もっともっと生きたかったろうに、遺された私達遺族は、本当に無念な思いをいたしました。

シャボン玉(野口雨情作詞)

1. シャボン玉飛んだ、屋根までとんだ  
屋根まで飛んで、こわれて消えた。
2. シャボン玉 消えた、飛ばずに 消えた  
生まれて すぐに、こわれて 消えた  
風 風 吹くな、シャボン玉とばそう

そんな時、野口雨情作詞のシャボン玉の童謡を聞きました。特に 2 番を聞いたとき、涙が出ました。それは、シャボン玉が娘・真理子のいのちの象徴であるように思えたからです。いろいろなシャボン玉があります。歌の 1 番にあるように高く屋根まで飛んで行き壊れるものもあります。出来てすぐに壊れるものもあります。二十歳で、人生これからというその時期に理不尽に殺されるその無念さは、なんとということでしょう。それにしても、この童謡の内容の深さは、「野口雨情さんが 3 歳の娘を亡くされる」という悲しい体験を歌ったものだと調べてわかりました。この詩は、亡き娘に対する鎮魂歌だったのです。悲しい・無念なのは、私達だけではないのです。そう思うと少し悲しさが和らいできました。悲しい時に共に悲しんでくれる人がいる。そのことばがある。そうすれば悲しみは半減して行くのです。そのことばとしての童謡の詩には、いのちを教える大きな力があることが体験を通してわかりました。その後、童謡をじっくり聴いてみたり、絵本を読んできたりする中で、常識的な考え方が誤りであることに気がつきました。つまり童謡や絵本には、もちろん子供への伝えたいメッセージがあると同時に大人へのメッセージがあることに気がつかされたわけです。今は、「大人こそ再度、童謡を歌い、絵本を読むべきである」と思

っていて、読む人の人生観、宗教観、宇宙観によって、広くかつ深く読める文学であると考えています。

娘を失って以来、「いのちとは何だろうか。私達のいのちは、どこからきたのだろうか。そして失われたいのちはどこへいったのだろうか。いのちは誰のものだろうか。」等々、いのちと向かい合う日々が続いています。そのため研究の方向もいのちに関することにしました。そうした中で、仏教は「いのちの教えである」ことに気付きました。

「娘・真理子はどこに逝ったのだろうか。」と悶々と娘のことを思っていると、次のような事実に行き当たりました。それは、私が結婚する前には、娘は世の中のどこにもいなかった。そして、昭和54年に二女として生まれてきて、私たちと20年間一緒に暮し、死んでいった。だから、今はこの世の中のどこにもいないということです。つまり、いのちが無（空とも言える）から出てきて実在（色とも言える）となり、実在（色）から無（空）へと帰っていったこととなります。般若心経には、有名な語句「色即是空 空即是色」があります。並べかえて空即是色 色即是空とすれば、空から色、色から空と展開しているようです。つまり亡くなった娘は空から来てまた空に帰っていったとなります。だから私達は空から来て空に帰る存在だといえます。このことを仏教では「成住壊空」と言います。「成」とは、生まれてくること、「住」は、この世に住んで生活すること、「壊」は、私達の体がだんだん壊れてゆくこと、「空」は、死んで空になることです。空に帰る、つまりその帰るところは生まれ故郷・浄土であるわけです。葬儀の時に白木の位牌には、帰元〇〇〇〇信士と「元に帰る」と書きます。或いは、帰空、帰真とも書きます。童謡の「夕焼小焼」の中の「帰る」という言葉は、大人へのメッセージとして「浄土へ帰る」という意味が読み取れます。

夕焼小焼（中村雨紅作詞）

夕焼け小焼けで 日が暮れて 山のお寺の 鐘が鳴る  
お手々繋いで 皆帰ろ カラスと一緒に 帰りましょう  
子供が帰った あとからは 丸い大きな お月様  
小鳥が夢を 見る頃は 空にはキラキラ 金の星

故郷（高野辰之作詞）

兎（うさぎ）追いし かの山、小鮒（こぶな）釣りし かの川、  
夢は今も めぐりて、忘れがたき 故郷（ふるさと）  
如何（いか）に在（い）ます 父母、恙（つつが）なしや 友がき、  
雨に風に つけても、思い出（い）ずる 故郷  
志（こころざし）を はたして、いつの日にか 帰らん

山は青き 故郷、水は清き 故郷

椰子の実 (島崎 藤村)

名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実一つ  
ふるさとの岸を 離れて なれはそも波に 幾月  
もとの木は 生いや茂れる 枝はなお 影をやなせる  
われもまた なぎさをまくら ひとり身の 浮寝の旅ぞ  
実をとりて 胸にあつれば 新たなり 流離の憂い  
海の日 沈むを見れば たぎり落つ 異郷の涙  
思いやる 八重の汐々 いずれの日にか 国に帰らん

私達は、ふだん、さまざまな意味に“いのち”という言葉を使っています。日本国語大辞典(小学館)によると、いのちの意味は6つあると示されています。①人間や生物が生存するためのもとの力となるもの。古事記では、「伊能知(イノチ)」と書き、万葉集では、「伊乃知(イノチ)」と書かれている。②生涯。一生。生きている間。③運命。天命。「命なりけり」という使い方をする。④唯一のたのみ。唯一のよりどころ。⑤そのもの独特のよさ。真髓。⑥男女心中の入れ墨の文字[命]。これから“いのち”についてまとめると、①と③はいわば、“見えないいのち”であり、②と④と⑤と⑥はいわば、“見えるいのち”といえます。

また、語源説については、8つの説がある。①イノウチ(息内)・イノチ(気内)の義。またイキノウチ(息内)の約。②イキノウチ(生内)の約。③イノチ(息路)の義か。④イノチ(息続)の意。⑤イキネウチ(生性内)の約。⑥イノキ(胃気)の転声。⑦イノチ(息力)の義か。⑧イノチ(生霊)の義。この語源説の中で、イキノウチ(息内)は、直接的に明快にいのちについて語っています。つまり人間は、生まれるとき「オギャー」という声で息を吐き(呼)、死ぬのは「息を引き取る」と言う、だから死ぬときは「息を吸う」わけです。従って、生きていることつまり「見えるいのち」とは、まさしく呼吸をしている息のある内です。これから“いのち”には主として2つの意味があります。第1には、「生物がいきていくためのもとの力となるもの」(見えないいのち)です。第2には、「生きている間、生涯、一生」(見えるいのち)です。

解剖学者の三木成夫は、いのちについて「命の波の中から、ごく自然に浮かび上がってくるひとつの“すがた”(見えないいのち)と、そこから切り離された個々の波の長さの“いのち”(見えるいのち)がある。」と言っています(図



1 参照)。また、“見えないいのち”について、「生物には親子代々の連続がある。およそ現代まで40億年の連続で、親から子へ、子から孫へ、孫から曾孫へと波状に伝わってゆくものである。そのような波をもたらす源としてのいのち（生物を連続させていくもとになる力）である。」と述べています。一遍上人は、「身を觀ずれば水の泡 いのちを思えば月のかげ」と歌われました。

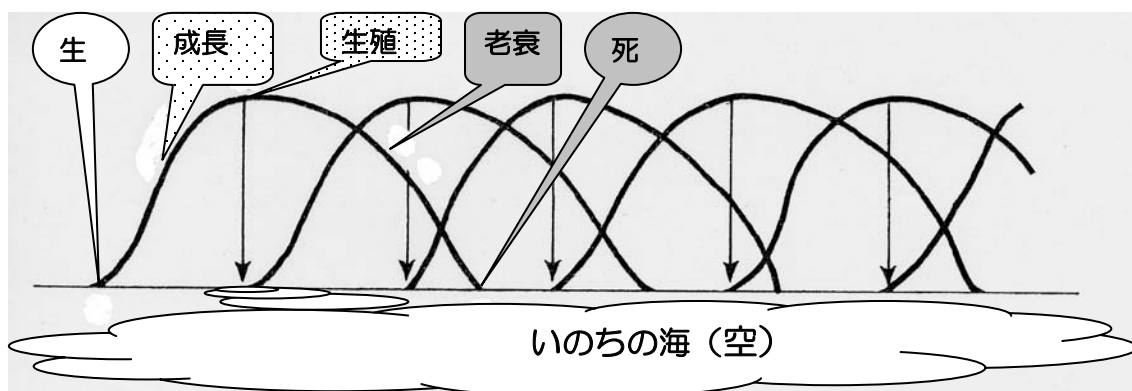


図1. いのちの波

著名になった絵本では、レオ・バスカーリア作の「葉っぱのフレディ」があります。この絵本には、いのちの誕生・成長・老化・死がフレディという名の擬人化した“葉っぱ”の一生を通して子供達に分かり易くみごとに書いてあります。その中で、フレディの「この木も死ぬの？」という質問に、ダニエル（擬人化した葉っぱ）が「いつかは死ぬさ。でも“いのち”は永遠に生きているんだよ。」と述べている場面があります。ここにいのちに2つの意味があること示唆しています。それはいつか死ぬいのち（見えるいのち）と永遠に生きるいのち（見えないいのち）と言えるでしょう。

私たち被害者遺族というのは、亡き子への深い愛、加害者への強い憎しみ、予期せず被害者遺族となってしまった「なぜよりによって私が・・・」という戸惑いなどから、深く傷つき、悩む日々を過してゆきます。その中で、ある遺族たちは、人生の希望と喜びを奪われたと思い、残りの人生をうらみの中に過し、自殺をされる方もあります。また、一方では、交通犯罪の実態を知ってもらい、2度と交通犯罪を起こさないよとの願をこめて生きて行く被害者遺族もあります。この後者の被害者遺族たちは、一つは、交通犯罪を起こさないように法の整備、交通手段の安全化など関係当局と連携して考えます。2つには、被害者遺族達が手を取り合って、「二度と理不尽な死は、起こしてはならない。」と一般の人々に呼びかけ、いのちの尊さを訴えていきます。

私たちは、ある出会いからこの後者の方向に歩んで行きました。平成20年

9月12日～14日に「生命のメッセージ展 in 出雲」をビッグハート出雲で開催いたしました。この期間に4000人ももの来場者があり、その反響の大きさにびっくりしています。

#### 由利子さんの話

今日は、いのちについての2つのまなざし視点について、話させていただきました。

一つは、「おおいなるものに生かされている存在」であることを悟り、感謝の生活をしてゆくことではないのでしょうか。

二つは、「今日、ただ今の命」についての視点です。「私たちが生きている今日という日は、昨日死んだ人が切に生きたいと思った日である。」

だから、この世のことはすべておかげさまで。

ご清聴ありがとうございました。